昭和60年1月1日発行　㈶高知市文化振興事業団

文化高知 3

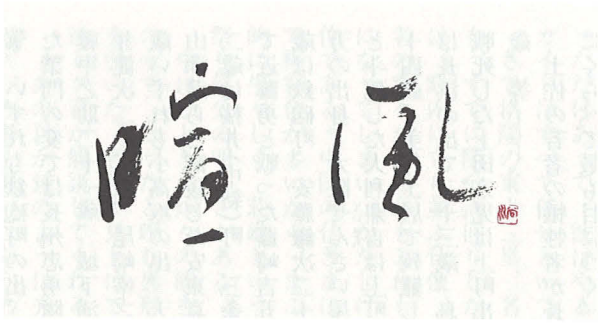
うるおいのある生活を求めて

山本　和

高知に住み始めて半年になる。夏には、数日休暇をとって、東は室戸から西は足摺を経て大堂、柏島、宿毛まで主に海岸沿いを車で走ってみた。予想以上に平地は少なく、山が海岸線近くまで迫っている。急斜面に石を積みへばりつくように建っている民家。道路際のわずかな土地にも稲や野菜が作られている。しかし山は緑におおわれ、海は抜けるように碧く澄んでいる。様々な自然の制約の中に生きる厳しさはあろうが、それでも、そこには都会に住む者が生活の近代化と引換えに失っていった生命のうるおいが感じられる。

坂本龍馬や中岡慎太郎をはじめとする郷土の志士達が日本の将来に思いを巡らせた近代日本の黎明期からわずか百二十年。この間、常に西洋に学べ、追いつけ、追い越せと近代化を進めて、今日我が国は自由世界第二位の経済大国となった。機械や技術体系の著しい進歩に基づく大量生産、大量消費の産業社会は、我々にモノの豊かさと生活の便利さをもたらしたが、同時に没個性的画一化を浸透させた。高度に専門化が進んだ制度のもとでは、個々の人間の関心は否応なしに部分的なものに向けられ、本来人間がもっと広い全体的な事柄に関与することによって自然に身につけてきた人間形成の場が失われがちになっていく。教育は学力偏重主義に陥り、より内面的なものに関心をよせる創造的でみずみずしい人間のあり方が次第に忘れられていく。

こうした近代化に伴う高度の専門化、没個性化といった現象は、当然欧米の主要国においても生じているが、私が数年間アメリカに住んだ経験を想い起こすと、多くの人が近代化に伴う弊害を防止する工夫や努力を日常生活の中で自然に心がけていたように思われる。



「暄　風」　浜田尚川

例えば、週末家族づれで郊外に行き、自然に直接触れながら運動をしたり、庭いじりや日曜大工をしたり、あるいは仕事とは全く離れたコミュニティの付き合いをする。気の合った同志が集まってコンサートを開いたり、教会のボランティア活動に加わることもある。学校教育はどちらかといえば子供達の人間形成、社会人としての責任の自覚といったところに重点が置かれ、知識の詰め込みは必要ならば大学に入ったあとでやれば良いといった考えである。もちろん自然環境、文化環境など我が国と条件は異なるが、うるおいのある生活を何とか守っていきたいという意欲がいろいろな機会に感じられた。

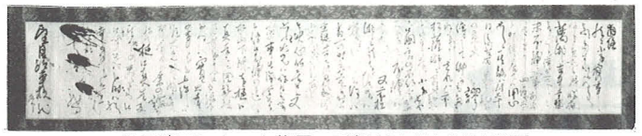
このように、できるだけ自然と接する環境を保ちながら、幅広く関心をもつように努め、興味をもった活動には積極的に参加していこうとする態度などは、今後我々も、もっと見習ってよいのではないだろうか。大都市周辺では自然に接すること自体、容易なことではないが、その点地方は恵まれている。残された美しい自然や地域の文化活動を大切に育てようとする環境のなかから、自発的な形でうるおいのある生活や人間性の回復を求める動きが高まってくれば、まさに「文化高知」の名にふさわしい時代が到来することも夢ではなくなる筈である。

（日本銀行高知支店長）

龍馬たち幕末青春の帰省を希う

宮地 佐一郎

最近、お城下の高知県文教協会で発見された坂本龍馬の望月清平にあてた手紙は、暗殺される一ヵ月前の切迫した時勢と、龍馬の呼吸を伝える重要書簡である。龍馬が土佐藩邸に入ることを拒否され、薩摩邸に入ることも「いやミ」になると遠慮し、結局四条町屋の醤油屋で殺されている。



望月清平にあてた龍馬の手紙（高知県文教協会所蔵）

本状は脱藩亡命者の宿命と覚悟がただよっていて哀切である。この龍馬たちの出身地土佐の高知へ、歴史を訪ねてきた他県人が、街中にある生誕石碑と桂浜の銅像を見ただけで、あまりにも歴史の資料乃至実像に接することが少なく失望して帰る例を、私はしばしば聴いている。このことは、龍馬たちが未だ故郷高知へ帰っていないことを意味する。

龍馬たちといったのは、龍馬と同じ頃脱藩して京都に、長崎に、他国で骨を埋めた土佐郷士出の若者たちのことである。私は過般帰省のおり、横川正郎先輩に導かれて、小高坂西町の望月清平、亀弥太兄弟の旧邸跡と、これに隣る池内蔵太の屋敷地を見て歩いた。広い庭と家居が建っていた由であるが、今日はすべていくつかの民家やガレージに変り、碑石も建てられてなかった。

亀弥太の魂の美しさは「木の葉、嵐にみだるゝのをりに逢、御国許のありさまきくに、袖しぼりあへず。大王の御為にこそ命死すべと、こころふりおこし侍りし時は来にけり」（文久三年十月、内蔵太の母あて）にしのばれる。また内蔵太の時代への勇敢な捨身飼虎の行動は、龍馬が家信のなかで讃えている。彼等は平和なそして豊かな家庭を捨て、維新夜明けの礎石となっている。このため家産を失い、子孫も高知では絶えている。

龍馬が文久の頃脱藩した後を追って、たくさんの若者が高知から北山越えに、長州へ、京都へ、江戸へ走っている。そして彼等のほとんどが、再び高知の土を踏むことがかなわず異郷に骨を埋めたのである。

思いつくままにその人々の名をあげてみると、元治元年京都池田屋事変では、さきの望月亀弥太は二十七歳、同じく石川潤次郎二十九歳、藤崎八郎二十二歳、野老山吉五郎十九歳、いずれも鉄砲町の出。同年おきた禁門の変では長州忠勇隊所属の伊藤甲之助二十一歳、城下浦戸町、柳井健次二十三歳、尾崎幸之進二十五歳いずれも小高坂の出。天王山で松山深蔵らと割腹した安東真之助二十二歳は桜井（中新）町。三条利札事件で近藤勇と戦った藤崎吉五郎二十二歳は鉄砲町、安藤鎌次二十四歳は久万の出身。大阪ぜんざい屋で新撰組と斗死した大利鼎吉は上町出身で二十四歳。美作土居で殉難した島浪間は長浜の出で二十三歳。鳥羽伏見で戦死した上田宗児は上町出で二十七歳、等――。

土佐の若者の犠牲者が長州や薩摩にくらべて最も目につく。優秀な人材が国難に赴き、春秋に富む生命を捧げたのである。しかし今日、高知で彼等の跡を見聞することは出来ない。私は長州萩へ旅したとき、維新に活躍した無名に近い若者たちの碑が建ち、生家あとも遺されているのを見て、感銘をおぼえた。それに比べても、土佐の幕末戦中派の魂は故郷に未だ帰ってないと思ったのである。

今年は龍馬生誕百五十年を迎える。桂浜か誕生地上町あたりに「龍馬記念館」の建設の声がたかまっていると聞いている。但し会館を建てても中に収蔵する資料が乏しいと、まことしやかに言う者もいる。そんなことはないのである。私が知っているだけでも龍馬関係の資料は他県に比べて決して少なくはない。

青山文庫に内蔵太あて、県立郷土文化会館に権平乙女あて、山内神社に乙女あて、さきの県文教協会の清平あて、弘松家に龍馬書簡四通と真蹟海援隊約規。秦家、田中家、竹村家にもある。さらに某所に北辰一刀流免許皆伝等の重要資料が散在している。そして東京の某古書店で、池家文書と共に龍馬晩年の書簡が五、六通、武市半平太二通もねむっている。ほかに東京の西山家（平井加尾の末裔）の龍馬袱紗、信州上田家の十通、東京伊藤家の十三通の書簡、神戸荒尾家の龍馬絶筆等は常時交替で借覧展示も出来るはずである。文教協会には収次郎爪書、間崎滄浪書状、亀弥太の母宛て二十数通の手紙等も発見されている。

龍馬記念館と共に、脱藩人帰国の館も併設し、他国に「身をひそめ候ハ、実ニいやミで候」とした龍馬たちの無念を払拭して、この人々を心より迎えてもらいたい。（作家）

かけだし建築家のひとりごと

小谷 匡宏

中世史の権威である鈴木成高早稲田大学名誉教授は著書『中世の町』の冒頭で「初めてヨーロッパの中世都市に踏みこんだ時、足が慄えた」と書いている。何がそれほど感動を与えるのであろうか。

日本にも良い建築は多い。法隆寺をはじめとする社寺建築や桂離宮を見て、外国人は一様に感心する。しかし、街並みはどうだろう。ベニス、フィレンツェ、シェナ、ヴェズレー、トレドと見て回ると、萩、倉敷、金沢も影が薄い。更に「今の高知の町は」と考えると脂汗が出る。それでも戦前はまだ良かった。日本壁、板塀、瓦屋根、生垣とくれば心が和む。

日本は二度にわたり過去を全て否定した。明治維新と太平洋戦争である。その混乱から街並みもまだ立ち直っていない。ブロック塀とトタン壁、広告物の氾濫の中で遮二無二働いている。もうすぐ世紀末。歴史的にはなぜか世紀の終りに新しい文化が創出されてきた。この混乱を収拾して、美しい町並みを取り戻す事は二十一世紀に生きる子孫に残す我々の責任である。

いま、我々建築家が為すべき事は多い。中でも重要な事は文化に対する市民の意識を高め、「美」に対する共通の認識を持つことである。良いパトロンが居なければ良い芸術は産まれない。ルネッサンスにおけるメディチ家、ガウディにおけるグエル伯爵の如く。権力を持った王や大金持ちが居なくなった今、市民がパトロンにならなければならない。

十九世紀にイギリスで設立されたナショナルトラストは発展して、1957年シヴィックトラストとして発足し、「質の高い建築・都市計画の促進」、「すぐれた建築物の保存、自然環境の美の保護」、「環境の俗悪化の阻止」等に大きな役割を果たしているが、昨年設立された高知市文化振興事業団はこのトラストによく似ている。

高知の街づくりに関連して、いま、呼びかけたいのは、

①機能・デザイン・コストの三要素が程良く調和する建築をつくること。

②外壁の素材・色彩を厳選し、タウンスケープとして建築を択えること。

③街のシンボルとなる個性の強い建物をつくること。

④優秀建築賞を設けること。

であるが、こうした面への積極的な対応も特に望みたい。（建築家）

白馬寺

川野和子

西安から北京までの旅に、内蒙古大学日本語科の学生トク君は、生きた日本語を使うチャンス到来と、私たちのグループへかけつけてくれた。さすが難関突破して外国語学部に入っただけあって、彼はやる気満々。ガイドはすべて任せといて…である。

さて洛陽の東十二里、名刹白馬寺も、すでに随分寺回りした私たちには、殿内に立ち並ぶ仏像、高僧、尊者の数々が、どれもこれも同じお顔になってしまい、かたじけなさも中位である。中国の仏さまは主に泥塑で極彩色が多いから、まことに現世的に生々しく、荘厳というより、お祭り気分の明るさがある。

中にひときわ炯々の眼をおでこにのせて、はったと睨む異形の像が目を引いた。思わず見上げていると早速トク君が解説してくれる。

「あの目が鏡のように光りを出して、バカ者を追いはらうのです」

「えっバカ者？」私はちょっと思案してから言った。「あらバカ者ではなくて化けものじゃあないの、ほらお化けのことよ」

トク君の浅黒い顔が紅潮した。

「そうですね、化けものでした。恥ずかしいですね。つまらない間違いです」それからいっとき彼の嘆きを聞く事となった。大学でもう四年間日本語の学習をしているが、活用する事がほとんど無いこと。まして日本人に会う事がほとんど無いから、せっかく覚えた単語もどんどん忘れていってしまうこと。卒業後も日本語を生かせる仕事があるのかどうか、心配で夜も眠れないこと、等々である。こんなケースはトク君だけではない。中国の事情を若干知る私は、聞いたとて胸が痛むだけで何もしてあげれない。

「ちょっと拝ませていただくわ」

私は、トク君から離れるとお賽銭をあげて合掌した。私は元来こういう事が苦手だが、思わず長い間、目をとじていたようである。

やがて頭を上げた私の前に、あっけにとられたトク君の顔があった。

「川野先生、無いものをなぜ拝むのですか」

正直な彼にとって、神仏はあくまでも人間が泥で作った人形に過ぎないものなのだ。

（そうね、無いものよね。だけどつい拝んじゃったのよ。あなたの日本語がきっと役立つようにってね）心で呟きながら庭に出ると、白馬寺二千年の歴史が、八月の黄砂に焼きついていた。（主婦）

美術館を考える

竹村文男

最近ようやく美術館建設促進の動きが活発化してきた。県では昨年、美術館建設のための基金制度も設けられ、一方ではおくればせながら作家を中心とした県立美術館建設期成同盟会も発足し、資金集めのチャリティ展や署名運動と、具体的な活動にも入った。喜ばしいことである。

全国美術館会議という組織があり百七十五館が加盟している。残念なことに、わが方は未加盟である。先日、会長の嘉門安雄氏（ブリヂストン美術館館長）を尋ね、いろいろ話を伺ったが、現在、美術館を持たない県は青森と高知の二県だそうな、まことにショックである。

わが高知県立郷土文化会館は、残念ながら美術館ではない。年に何回かは全国規模の展覧会を招へいしたり、県展や高知市展のような重要なエキジビション会場とはなる。だがそれは、ある程度、美術館的な使用がなされているということで、美術館としての役割が果たせているとはいえない。郷土文化会館の性格は、高知県立郷土文化会館の設置及び管理に関する条例（昭和四十四年十月十五日条例第三十一号）というのがあって、その第一条に、「郷土の歴史、民俗の資料及び県内外の美術工芸品等を収集し、保管し、及び展示して郷土の文化及び芸術の振興に寄与するために、高知県立郷土文化会館を設置する」と規定されている。つまり、いま話題の歴史民俗資料館と美術館とを兼ね備えた施設として建設されたわけである。だが、歴史民俗資料館にしても美術館にしても、この程度の規模の施設ではいまや極めて中途半端なもので、同じ年（昭和四十四年）に建てられた愛媛県立美術館と較べるとその違いが歴然としている。

ところが、知識人の中でも、ときおり、郷土文化会館では、全国レベルの展覧会も開かれるし、結構美術館としての役割りを果たしているから、現状でも充分ではないか、という意見がある。この場合、われわれ職員の日頃の努力を評価されたみたいで、つい嬉しくもなるが、これでは美術館のもつ使命をご存じなさ過ぎる。また反対に、県展の会場が窮屈過ぎる、広びろとした会場がいるから是非とも美術館を、という声があがる。確かにそのとおりだが、この場合、美術館というのは単なるいれものではありません、と言わずもがなのことを言いたくもなってくる。意外にも公立美術館の使命というか、存在意義というものを知らない方が多いためにである。

私たちの間では「美術館は箱ではない」といっている。美術館は優秀な学芸員が数人いて、その人たちの研究、活躍の結果が「あそこはよくやっている」という評価となって出て来るべきで、学芸活動の伴わない郷土文化会館は美術館ではない、のである。また、県展開催に窮屈だからゆったりした会場が欲しいとの声は、その箱を求める声である。確かに、ここしばらく日展も高知にはやって来ない。日展が巡回して来ないのは高知県だけ、一昨年の第十五回展は、松山、高松、徳島の三市を巡回した。わが郷土文化会館では、どんなに詰め込んでも三百余点の巡回作品が収容し切れない。残念ながら日展の作品には当分の間お目に掛れないだろう。

美術館は箱ではないといいながらも、箱が小さいために、県民は随分と不便をかこっている。

青森と並んで高知が最後の県になったからには、いっそこの際これを逆手にとって、全国の美術館の長所ばかりを学びとり、地方美術館のサンプルとなるような、思い切った凄いやつを建ててみることだろう。

最近、視てまわった新しい県立美術館、福井、山梨、群馬、埼玉、岐阜、三重など、何れもすばらしい設備を誇っている。僅か数年の差で、愛媛県美などは比較の対象から失格である。試みに、今、手許にある資料から各美術館の面積を比較してみると、別表のとおりである。

数字の上では、四国の三館は展示場の広さでは大同小異だが、建物のスケールは高知が最小である。その他の館では展示場の面積は四国のほぼ二倍かそれ以上、建物全体では二倍から三倍の広さになっている。わが郷土文化会館が、よその館に較べて如何に小さいか、展示場の面積は辛くも四国内では同等としても、展示場でない部分が如何に少ないか、おわかりと思う。全国並みの規模とするためには、今の建物を二倍に増築したうえ、さらに県立図書館もとり込んでしまわなければならない。

日本で美術館といえば、まずまっ先に浮かぶのが東京都（上野の）美術館だが、これは展示専門の美術館で、いわゆる箱としての施設である。公募展のための貸会場だから、こんなものは地方美術館のサンプルにはなり得ない。前記地方美術館が一様に備えている機能は、常設展示（館蔵品の展示）と企画展示（全国的レベルの展覧会の開催）で、さらに普及および研究活動（講堂、アトリエ、実習室、図書室、研究室、資料室等）を重視している。そのため、展示関係では、二千三百ないし三千三百平方メートルと、わが郷土文化会館の二倍以上の広さを必要とし、さらにそれに匹敵する普及活動部分も必要となる。そのほかにバックヤードとして、収蔵庫、到着資料の一時保管庫、収蔵資料のための殺虫燻蒸室、展示用具の倉庫、準備室、工作修理室、写場、そして利用者のためのエントランスホール、休憩室やレストランなど、可成りの広い空間を考えなければならない。

各館の面積比較（別表）

館　　名	延床面積	展示関係面積
高知県立郷土文化会館	2,815㎡	1,420㎡
香川県文化会館	4,599㎡	1,013㎡
愛媛県立美術館	4,074㎡	1,531㎡
石川県立美術館	11,427㎡	3,292㎡
三重県立美術館	7,880㎡	2,561㎡
岐阜県美術館	7,160㎡	2,235㎡
山梨県立美術館	6,883㎡	2,275㎡
埼玉県立近代美術館	8,577㎡	3,331㎡
滋賀県立美術館	8,552㎡	2,300㎡
東京都美術館	15,148㎡	12,402㎡

全国的には、立派な美術館を建設はしたものの、中味がなくて困っている例も多いようである。となりの徳島県では今、徳島市の外れに雄大な「芸術の森」構想が実現に向かって進行している。聞くところによると、ここに建設されようとする美術館はあえて近代美術館としないで、現代美術館とする方針のようだ、徳島県には地元に優秀な美術家がいないためだろうか。現代美術館だから多分、過去の地元作家の作品を展示する常設展示の部分は無いか、できても僅かのスペースとなるだろう。方向としては、激動する世界の美術界の動向をいち早く感じ取って、その時代時代に即した展観を続けてゆくということになりはすまいか、よそごとながら、うまくやってゆけるだろうか、いささか気になるところではある。

本県には幸い、洋画百七十点、日本画四百三十点、版画、書、その他の美術品約四百点の収蔵品があり、この中にはご承知の、山脇信徳、山本倉丘、今西中通など全国に通用する名品も多い。これに加えて本年は、高橋虎之助の遺作も新たに仲間入りしようとしている。この点では既に中味はでき上がっていて、いれものの完成を待つばかり、全国でも特異な例といえそうだ。

いまここで、私たちが望む美術館の理想像は、

①交通至便の場所に
②快適な自然環境のもとで
③充分なゆとりを持たせたゴージャスなムードの施設
④常時、充分な量の館蔵品を観賞できる常設展示
⑤レベルの高い企画展、特別展の開催
⑥県内作家の発表の場として利用できるギャラリー
⑦学芸員活動に支えられた研究会、講習会の開催
⑧随時利用できる図書室、研究・実習施設
⑨ゆったりとくつろげる休憩室、レストラン

となるが、考えてみれば何も目新しいことではなくて、この頃の、よその美術館がやっていることを、改めて抜き出したに過ぎないようだ。だが、折角というと変だが、ここまで遅れたかぎり、よそには絶対に負けんようにしたいものだ。

そして最後にもうひとこと、美術館の建設は、美術家ばかりのものではなく、おじいちゃんも、おばあちゃんも、学生や子どもも、県民ひとりひとりに、それぞれの使いみちのある施設として創りあげることが大切ではないだろうか。

（県立郷土文化会館　次長）

高橋虎之助
「昌子」昭和11年文展
（郷土文化会館所蔵）

木村会館人形劇場

廣松　ひとし

子どもたちに、手づくりの明るく健康的な人形劇を、常設の劇場で、という目的で木村会館人形劇場は昨年十月にオープンしました。毎月、県下の人形劇サークルの応援を得て開催し、平均観客数は百五十名とにぎわっています。人形劇場に寄せられたアンケートの一つを紹介します。

人形劇団ピコロ座公演

「二人の子どもにとって、チャンとした人形劇を見たのは初めてです。つれてきて本当に良かった。この劇場を子どもたちのために長く続けてください。ずっと見にきます」

この劇場の母体となった人形劇団ピコロ座は、昭和三十年に創立しました。一貫して、高知における人形劇活動の先駆的実践、普及活動と伝統人形劇の継承をめざしてきました。手づかい人形による公演は、春の市文化祭、秋の県芸術祭、それに保育園などの巡回公演と千二十回に及び、二十九万人の観客を得ました。また、劇団やサークルの相互交流、研修のために、昭和五十一年から毎年高知県人形劇フェスティバルを主唱してきました。これには県下はもとより愛媛、香川、徳島からの参加があり、来年ははや第十回を迎えます。

交流のなかから、定期的な発表がしたい、常設の劇場がほしい、という声がおこり、木村会館人形劇場の実現に結びついた訳です。ここを児童文化の創造の場――子どもの城として発展させてゆきたいと考えています。

一つ一つ手さぐりでありますが、いま、確かな一歩を踏み出した人形劇場に、市民の皆様の暖かいご支援をお願いいたします。

（人形劇団ピコロ座代表）

連絡先　高知市立旭文化センター内
木村会館人形劇場
電話　⑫ 0374

自然を記録するということ

岡部　正明

数年前、語部（かたりべ）運動というのがあった。戦争体験を風化させないために、政治的な手段や統計処理では表現できない心と肉体に残った戦争の爪痕を、当事者自身の口で語ってもらい正確に書き留め、世界平和の指針とする運動である。

私達、高知ネイチャークラブは人間の生活の舞台である自然を澄んだ目で見、正しい姿を記録し続けることによって、自然の今を把握し、将来の人間に自然との調和と共存を訴えることをめざしている。自然の語部たらん、というのが私達の願いである。

その手段として写真が一番手近かで有効な方法だと会員の意見が一致し、多くのコンテストや自己主張が強い写真展とは一味違った、自然が自然自身を語るような写真展を開いてきた。ささやかながらも着実に成果をあげつつあると思う。

第3回写真展（NHKロビー）

次は記録の活字化である。戦前、戦中に高いレベルで活躍した土佐博物学会の先輩方に励まされ、その会誌「土佐の博物」をモデルに「博物土佐日記」を刊行し、現在四号まで出来上がった。他の府県ではよく「○○県の鳥」や「○○山の昆虫」等々記録に徹した書籍冊子が次々と出されており、何も無いのは高知だけというほどになってきた。日毎の報道では学力、学力とわめきたてているが、足下の事象をおろそかにして良いものだろうか。

往時の土佐博物学会員は理系、文系の区別無く、あらゆる職業の人々が参加していた。今、私達はみんなが観察し記録できるような組織づくりと運動を盛り上げたいと願っている。

昭和五十六年十月発足、会員十四名

（高知ネイチャークラブ代表）

連絡先　岡部正明方
電話　⑬ 3704

はまかぜ読書会

田中　里

ふり返ってみると、もう二十五年も続いている。土佐の人はあきやすいといわれるが、よくもここまで続いてきたものである。先日全国表彰をしていただいたが、これも山高きをもって尊とせずというように、永く続いたが故の表彰に終わらせてはならないと考えている。

この読書会が呱々の声をあげたのは、昭和三十四年の勤評闘争のさなかであった。終戦によって、はじめてなにが正しいかを知ったにがい経験を得て母親になった私達は、勤評という民主教育をゆさぶる問題に大きな危機を感じ、「もっと深く知りたい」「なにかをしなければ」という思いに駆られて始めた学習会であった。

はまかぜ読書会の例会

はじめは身近な教育問題を主とした話合い学習であったが、ちょうど教科書学習をしているときに、全国的に注目された「教科書無償運動」が起こり、私達もこの運動に参加することによって厳しく鍛えられ、教育というものを更に身近に考えるようになった。そしてしばらくは教育問題を中心とする学習会が続いた。

時代の流れとともに会員も子育てを終え、ＰＴＡ活動からも卒業するようになり、仲間による読書会として定着した。この二十五年間にとりあげた本は、多数にのぼっているが、最近では『論語』や『日本文化史』（家永三郎著）、『帝王学ノート』（伊藤肇著）をじっくり読み合った。

永い間の積上げの大切さを、いましみじみと感じながら、これを更に大きいものにしていきたいと念じている。

（はまかぜ読書会代表）

連絡先　田中　里
電話　㊷ 2774

私設・多目的ホール

キャラバン・サライ

「文化は、人と人とがコミュニケートし、理想に向かって共に動き出すところから生まれる。いろんなカラーを持った人が集いあって、新しい何かを創出する。そんな交流の拠点が高知に必要だ」

東京での都会生活の経験から、郷土での自立と限りないロマンを胸に抱いて作った広場 ― それがレストホール・キャラバン・サライである。

昭和五十八年五月、七千万円を投じて完成したこのホールは、何よりもその利用の多彩さと自由奔放さが大きな特色である。今までの使われ方をみても、映画会、社交ダンス、オードブル・パーティー、ライブ・コンサート、個展などの各種発表会等々、ずいぶんと多岐にわたっている。単なる貸し会場とするか、魅力あふれる出会いの場、創造の空間となるか、プロデュースする人の器量が試される場でもある。利用者のニーズを先取りした音響機器や照明器具、スクリーン常設のステージ、使い勝手の良いクレーン設備、それらをどう活用し催しを盛り上げ、自らのものとするか ― 企画から演出まで、使う人の知恵や工夫、力量によって効果はぐんと違ってくる。

キャラバン・サライ

押し着せのものでなく、好きなものを好きなように、自らの手で作り出す。こうした経験を積み重ねていく中で、中央の物真似でない、真に高知発の文化、「メイド・イン・高知」として誇れる何か（モノでもファッションでも良い）が生み出され、大きく育っていくことを願っている。

都築房子個展

（岩目有祐）

連絡先　レスト・ホール
キャラバン・サライ
電話　㉔ 5474

風伯

画壇

ある会で偶々同席したK画伯と話しあったことがある。近時、高知の画描きたちはどうもグループとして統一がとれていない、個性的なことはよいが、高知という画壇のフンイキを盛上げて、美術への欲求を高めるということが見られなくなった。

戦后の窮乏時代は一つの気運のようなものを皆が云わず語らずのうちに醸成していた。県展もそういうものの間から生まれ出たように思う。美術人口はあの頃よりはるかに増加しているのに、何故だろうか。〝つまりは経済生活が豊かになったためではないか〟ということで一致した。思うにいつでも生活し得る。食べられるということが、美意識はあっても、そのことに対する努力を放棄さしてしまったようだ。どうも人間はシメツケがないと駄目なようですね、といって笑いあったが、画伯は又こうもいった。「人を引っぱってゆくだけのエライ師匠がいなくなった、これは私などの責任でもある」と。

ついK画伯に罪をおっかぶせるようなことになって恐縮したが、一方考えようによれば、美術の国際化が進んで一地方の画壇などというものが画家志望者の頭から失せてしまったということかもしれない。しかし、なお、下手でもよい、心の欲求が画面に噴出するというほどの画が出てこなくなったのも事実で、ディレッタント画家ばかり多くなったように思う。昔の文人画家といわれた人たちは、絵も又学芸の表現の一つと考える面があったが、現代のディレッタントにはそれもない。

（呆）

いまこそ人間都市を

画一化されてきているとはいえ、よく見ると、それぞれの都市に、それぞれの表情がある。一見同じように見える目抜き通りのにぎわいや裏街のたたずまい、交叉点の行き交いが、都市の歴史や生活のなりたちによってちがっている。

しかし都市の本当の顔は、文化によってしか形成されない。道路や下水道、公園などの都市のインフラ・ストラクチャーがいくら整備されても、それだけでは都市の顔は生まれてこないし、ましてや人々の心に語りかける都市の表情はでてこない。

人間のからだに例をとっていうと、循環器や消化器がいくら調子よく機能しても、それで人格や個性が発揮されるものにならないのと同じである。ハードな都市整備の重要性を否定するつもりは勿論ないが、都市の個性を発揮する必須の条件として、〝文化〟をおとすわけにはいかないと思う。

高度経済成長のモノの時代は終わった。〝こころ〟の重視される時代である。人々の価値観や生活観が大きく変わってきている。いまこそ人間都市、文化都市づくりが重視されなければならないときである。

コンクリートと鉄で固められた乾ききった都市は、人間を疲れさしギスギスさすだけである。かつて高知市も青年会議所を中心として、人間都市づくりが大きく叫ばれたこともあるが、いままさにそのことを本気で取組むべきときにきているのではないか。

（登）

市民フォーラム

財団の新しい事業として「市民フォーラム」を始めます。その名のとおり市民が主体となって、〝高知〟にかかわる諸問題について論じ合い、その内容を記録し、積み上げをはかっていこうとするものです。

一回二～三時間程度、メンバーは十人位までとし、単なる言い放し、議論のしっ放しでなく、テーマに基づいた話し合いをおこない、出された意見、考え方、提言を集約し、それらをレポート化することによって、実践に結びつけてゆきたいと考えます。

研究テーマを持っておられる方、問題意識をぶつけてみたい方、あなたの斬新な企画をお寄せください。

文化活動情報コーナー

市内の各種団体、グループ、サークル等の文化活動に関する情報を収集し、活用することを目的に情報コーナーを設けました。パンフレットやちらし、新聞・雑誌の切り抜き、会報等々、文化活動に関するものであれば、どんなものでもかまいません。このコーナーのために五十四個の引き出しのついたキャビネットを用意しました。

ここに記録がたまることで活動状況がわかり、また、お互いに共有することで交流の輪も広がっていくと思います。高知の文化を高めるために、質の良い情報を積極的に寄せていただくことを期待しています。

同時に、財団では先進都市の文化情報や関連専門書などの収集にも努めています。事務局のスペースや体制面で若干の制約はありますが、調査、研究に活用してください。なお、財団で備えてほしい図書、資料がありましたら、お申し出ください。

学術研究助成事業

今までに、「高知市民の健康実態及び医療需要に関する調査研究」や「土佐自由民権七千日の日録作成」など六件の学術研究の申し込みをいただいています。

さらに、地域経済の発展や地場産業の振興策についての研究、まちづくりのビジョンや手法についての研究、学力の向上や青少年問題を含む教育振興についての研究等々、当面する課題はもちろん、将来展望をもった方策について地道な研究を期待しています。助成を希望される方は随時申し込みを受け付けていますので、ご連絡ください。

あとがき

▼初春のお慶びを申し上げます。ことしは国際青年の年でもあり、龍馬生誕百五十年の記念すべき年でもあります。高知の文化にとって飛躍の年となるように、さらに英知を集めたいと思います。よろしくお願いします。

▼「文化高知」は、奇数月に発行していますが、毎回多くの方に財団まで取りにきていただいています。遠方の方や都合で来られない方のためには郵送しますので、宛先（住所・氏名）を記入した封筒に切手を添えてお申し込みください。

▼なお、次号から増ページして連載物を載せる予定です。内容についてのご希望、ご要望をお寄せください。また、ご意見、ご提言等の投稿も歓迎します。

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目一番三十号
高知市民図書館内
TEL（〇八八〇）㉓四三六五

ビデオ・写真で残す郷土の記録

高知の映像コンテスト

まつり/曜市/まちの景観・美観
河川/生活の中の文化
コミュニティ活動/高知の見どころ・旧跡

など、あなたの目にうつる高知の記録を気軽にお寄せください。

締　切　2月9日
入選発表　3月上旬

作品募集中

くわしいことは 電話 73-4365へ

国際青年の年・龍馬生誕150年記念

「龍　馬」のうた

作詞のみ／作詞と作曲／楽譜
自作・自演の録音カセット
○いずれの形でもけっこうです。
○締切は3月5日（ただし、作詞のみは2月15日必着とします）

若さ・未来性・国際性・行動力

など、既成のものにとらわれず、龍馬のもつ魅力を謳いあげ、広く愛唱されるものを期待します。